

第九章 他国の史書で^た糾す古代の日本



▲ 三国志時代(220～280年頃)の東アジア

平成二十七年十月十九日追記

中国や韓国・北朝鮮は、今も国際問題が生じる度に歴史問題を持ち出し、日本の植民地支配の時代をネタに、ゆすりをかける。近世の出来事だけに目を向ければ、それも否めないことであろう。

しかし中国は古代、漢や魏の時代から、自らを超大国・宗主国として、半島諸国や倭国(日本)を属国として扱い、内政にも絶えず干渉してきた²¹⁾。

こうしたことは、「書紀」は沈黙しているが中国は自国の史書ではつきりと記している。また、韓半島の諸国とは、古くから常に接触があり、あるときは友好し、また紛争も重ねてきた。とくに、百済とは終始親密だったように「書紀」は書いている。

しかし、そのうち百済国内の内乱が引き金と成り、王族や権力者らの国際陰謀によって、大和政権が乗っ取られる事態になったことは、第十章で詳述する。

百済は、660年、唐・新羅の連合軍に滅ぼされ、それを復活させようとした百済王子の翹岐(書紀名)中大兄が、

663年8月27日、倭国(日本)から水軍を派遣、百済軍との連合で、唐・新羅の連合軍に立ち向かったが白村江の戦いで大敗。同年9月7日、百済の国体が完全に滅亡した。同年9月24日、百済人らが船で多数日本に逃避してきたことは「書紀」にも詳しく記されている。

古代日本の主な外交や紛争の記録を、他国の史書や碑文から拾ってみると、おおよそ次のようである。ただ、一部はすでに書いた章と重出することを断っておきたい。

近隣諸国の動静

古代の日本を巡る記録を見る前に、近隣諸国、つまり韓半島の国々やアジア大陸(中国)の建国動静と日本との関係を概観しておこう。

【アジア大陸】

中国最古の史書「史記」¹²⁵⁾によれば、BC260年、秦の(昭王)47年、秦の將軍白起が趙の趙括軍を破り40万の趙括の士卒が降伏する。白起はことごとく生き埋めにして殺す。

そして、BC 259年、「秦の(昭王)48年1月、趙政が趙の都邯鄲で子楚夫人の子として誕生する。趙政は後に秦の始皇帝となる嬴政のことである。

そして、秦の(孝文王)4 (BC 247)年、莊襄王が韓・趙・魏・楚・燕・斉の六国を滅ぼし秦を建国する。この年、秦で莊襄王が没し、嬴政が王位を継ぐ。さらに、秦の26 (BC 221)年、秦王嬴政が統一王朝をたて始皇帝を名乗る。

しかし、秦の二世皇帝2 (BC 207)年7月、丞相の李斯が次男とともに趙高によって腰斬の刑に処せられるなど内乱があり、秦は三代15年で漢の高祖に滅ぼされて滅亡した¹⁶⁾。

また、漢の(高祖)5 (BC 202)年1月4日、劉邦が洛陽で皇帝に即位し漢を建国する(前漢 II BC 202 ~ 8年)。首都は長安。東の洛陽を都とした後漢(東漢)に対して西漢とも呼ばれる。以後、二千余年の中央集権政治の骨格を確立すると同時に、漢字・漢文によって代表される漢民族の文化の母胎となった。しかし、14代・210年で王莽に篡奪

されて滅亡、25年に後漢として復活した¹⁶⁾。

・ BC 108年、前漢の「武帝が衛氏朝鮮を滅ぼし、古朝鮮時代が終焉を告げる。その地に楽浪・臨屯・玄菟・真番の4郡を設置する」と、漢は韓半島北部も占領した。

BC 80年、「漢の元鳳1年9月18日」、「史記」の撰者司馬遷没。66歳。

BC 8年、「漢の初始1年11月25日」、王莽が帝位に就き、新を建国。前漢が滅亡する。

AD 23年(以下ADを省く)、「漢の更始1年9月」、王莽が、長安を陥落させた劉玄の軍により殺され、新が滅亡する。

同24年、「漢の更始2年2月」、更始帝が長安に遷都する。25年、「漢の更始3年6月22日」・「後漢の建武1年6月22日」、劉秀が帝位に就き、漢朝を再興する(後漢の光武帝)。「後漢の建武1年8月」、赤眉が劉盆子を皇帝に擁立し更始帝を廃して長安を占領、後漢を建国(後漢書)。
・ 36年、「後漢の建武12年11月」、蜀に自立していた公孫述が滅ぼされ、後漢の統一が完成する。

同220年、曹操の子丕が、後漢の献帝を廃し魏を建てる。首都は洛陽。華北を領し、呉、蜀と天下を三分し三国時代¹⁶⁾となった。

・265年、魏の臣下司馬氏が晋を建てる¹⁶⁾。「西晋の秦始皇1年」12月、武帝が即位。

同280年、「呉の天紀4年3月15日」、呉王の孫皓が晋に降伏し、晋の中国全土統一が成る。

同316年、「西晋の建興4年11月12日」、魏に代って265年に司馬炎が建国した西晋が滅亡する。

同319年、「前趙の光初2年6月」、劉曜が国号を漢から趙¹⁶⁾に改める(前趙)。

同330年、「後趙の建平1年9月」、石勒が帝位に即く(後趙)。

同420年、南朝最初の王朝、東晋の部将劉裕(高祖)が宋を建国。建康(南京)に都した。八世で斉王の武将蕭道成に帝位を譲り滅んだ。建国者の姓をとって劉宋と称される(420〜479年¹⁶⁾)。宋は中国の南北朝時代の王朝で、建康(南

京)を都として昇明三(479)年まで続いた⁶⁰⁾。

同502年、「梁の天監1年4月10日」、武将蕭衍(38歳)が、和帝の禪讓を受けて即位し、武帝と称して梁王朝を樹立する。

同550年、「北斉の天保1年5月12日」、東魏の実力者・高洋(21歳)が、東魏の皇帝から禪讓を受けて文宣帝となり、北斉を建国する。

同581年、北朝の北周の権臣楊堅(文帝)が、静帝の禪讓を受けて隋を建国。都は大興(長安)。589年、南朝の陳を滅ぼして中国全土を再統一し、唐制の基礎となる諸制度による集権的な帝国を建設。二世煬帝は大運河を開き、大規模な外征を行ったが、各地に反乱を引き起こし南北統一後、618年3月11日、「隋の義寧2年3月11日」、煬帝が將軍宇文文化及に殺され隋が滅亡した。

同618年、「唐の武徳1年5月20日」、李淵が皇帝の位につく。李淵は高祖と称され、唐を建国する。

同960年、趙匡胤(太祖)が五代のあとをうけて中国の統

一王朝宋を建国。注(開封)に都して、中央集権を徹底し、文治主義の君主独裁制を樹立。1127年、金に圧迫され9代で江南に移った。それ以前を北宋、以後臨安に都して蒙古に滅ぼされるまでを南宋と称する¹⁶⁾。中国大陸ではこの間、目まぐるしく政権が入れ替わり、国の編成・再編が続いた。

【韓半島諸国】

BC 37年、高句麗の始祖東明王が即位する「三国史記」。

BC 18年、百濟始祖王温祚が即位し、河南慰禮城に百濟

建国、東明廟を建立する「三国史記」。

42年、金首露が駕洛国(金官伽耶)を開く。駕洛国は、

韓半島南部に在った小国。

57年、倭の多婆那国生まれの脱解が、新羅の4代王に

なる「三国史記」。新羅王脱解は、もと多婆那国(丹波国・

但馬国あるいは肥後の玉名郡か)の所生なり。其の国、倭

国の東北一千里に在り「新羅本紀・脱解尼師今即位前紀」。

65年、始林は国号を改め鷄林とする「三国史記」。新羅の脱解王が城の西方の始林に鷄の鳴くのを聞き、「始林」を「鷄林」と名づけたという「三国史記」の故事から新羅の別名。転じて朝鮮の異称となった¹⁶⁾。

四世紀中ごろ、朝鮮南東部の辰韓12国を斯盧国が統一して新羅を建国、慶州に都した。503年、新羅で国号と王号が定められる。これまでの斯羅、斯盧、新羅などの国号が新羅に統一される。新羅は、6世紀に任那を滅ぼし、半島から倭(日本)勢力を駆逐して百濟、高句麗と三国時代を現出した。7世紀には唐と結んで百濟、高句麗を滅ぼし、大同江以南の半島最初の統一国家をつくった。しかし、935年高麗の太祖王建に滅ぼされた¹⁶⁾。

国交と紛争の記録

○秦の26(BC 221)年、秦王嬴政が、韓・趙・魏・楚・燕・斉を滅ぼし、初めて統一王朝をたて始皇帝を名乗る。このとき徐福の故地育が滅ぼされて滅亡、秦に併合された(徐

福25歳)。

○秦始皇帝3(BC21)年、始皇帝嬴政が2回めの天下巡行を行う。「齋人徐芾(徐福)ら上書し、海中に三神山ありと言う。名を蓬萊・方丈・瀛洲と言ひ、仙人ここに居す。

身を清めて童男女と共にこれを求めんことを請う。そこで徐芾と童男女数千人を海に出し仙人を求めさせた」とある。徐芾は日本では徐福のことである。徐福は、東海の嶋に向けて第一回め出航。

○宮下文書¹⁰⁰には、「徐福は東海の島日本列島に仙薬を求めると偽り、一族五百数十人を引き連れて集団移住した」とある。

○始皇帝12(BC210)年、「始皇は徐芾(徐福)に命じ、神の持つ珍品を求めさせたが帰り、偽って云う云云。『神は、お前の秦王の供物が少ないので見せることはよいが与えるわけにはいかない』と。徐福は、『どんな供物を献げたらよろしいのでしょうか』と尋ねる。海神は答えて『良家の童男・童女および百工を献ずれば望みが叶えられよう』

と言いました。始皇、おおいに悦び童男女三千人、これに五穀の種と百工を加えて派遣した。しかし、徐福は平原広沢を得て王として止まり来たらず。秦の民はこのため嘆き悲しみ、乱を起こそうという反始皇帝勢力が十軒のうち六軒にも増えた。「淮南衡山列伝伍被の証言」。徐福は童男女三千人・百工・五穀の種を携えて中国大陸を最終船出(徐福36歳)。

○この年、徐芾(徐福)二行の出航を見送った「始皇帝は、宮都威陽へ帰る途上、平原津で発病した。その年の夏7月、帰らぬ人となり、中国陝西省の秦始皇帝陵墓に葬られた(始皇帝嬴政49歳没)。

第二章でみたように、徐福一行は日本列島の各地に辿り着き、長江流域のすすんだ稲の品種や水田稲作、養蚕や機織り等の技術を日本列島各地に伝え、弥生文明を先導した。

○『漢書』地理志に、「樂浪海中有倭人、分爲百餘國、歲時來献見云」 倭人は樂浪海の島に在り百余國をなし、歳

時を以て来たり献見すと云う」(BC 2世紀中頃のこと)。

須佐之男尊がBC 2世紀中頃に創建した和国を、その後中国は「倭人」・「倭国」と書いた。その頃から漢王朝に、おりおり貢献していたことが知られ、須佐之男尊が越の豪族八口を平定した時も漢代の鉄刀が使われていた。これを「記紀」は十握剣と書き、天理市の石上神宮では「師の霊」としてこれを祀っている。おそらく、これは須佐之男尊の父布都命が漢から手に入れたものであつたらう。

また、「後漢書・列伝・東夷・倭人条」には、「倭は韓の東南の大海の中に在り、山島に依りて居をなし、凡そ百余国なり。武帝が朝鮮を滅ぼしてより、漢に使訳の通ずる者三十許の国にして、国は皆、王と称して世々伝統す。その大倭王は耶馬台国に居る」とあるように、各地の豪族が支配する小国が100余国あって、通訳を介して30国ばかりが漢朝に通じている。倭の国々は皆、王と称して代々世襲している。総元締めの大倭王は大和国に居ると

云うのである。この文面には年次を欠いているが、おそらく「三国志」の「魏書・東夷伝」を見て書いたものであろうとみられ、「大王が大和国に居る」としているから、大歳(饒速日尊の時代から3代安寧天皇時代、つまりBC 1世紀初頭から1世紀頃のことであろう)。

韓半島の国々との関係をみると、○新羅の始祖赫居世西千八(BC 50)年、「倭人らが兵を率いて始林(後の新羅)の边境(国のはて)を犯さんと欲す。始祖の神徳あるを聞きて乃ち還る」(「三国史記新羅本紀」⁸⁵⁾)。また、「瓠公を遣わして馬韓に聘礼をつくし招くせしむ(中略)・辰韓の遺民より、以て下韓(辰韓と弁韓)・楽浪・倭人にいたるまで畏懐せざるはなし。而れども吾が王は謙虚にして下臣を遣わし修聘せしむ。礼に過ぎたりと謂うべし云云」(赫居世西千三十八(BC 20)年二月条と、始祖王の人徳を称え、「倭人、兵船百余艘を遣わし海辺の民戸を掠む。六部の勁兵を発して以て之を禦ぐ」(同本紀十一(14)年条)とみえる)。

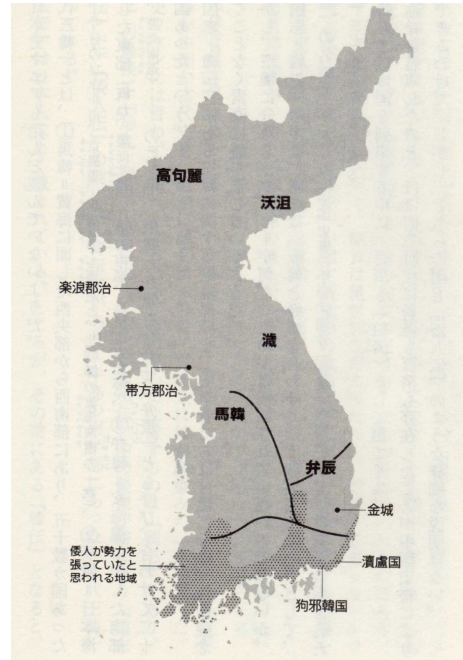
どこの倭人かは不明であるが、起原前後の時代から始林（後の新羅）の国境を犯しに行ったのであろうか。

室谷克実氏²³⁶⁾は、「日本や韓国では、文明・文化は朝鮮から移入された」と習っているが、「三国志韓伝」や「新羅本紀・三国遺事」の記述から、「新羅の基礎は倭種が造った。倭は新羅と地続きだった」とする。そして、「魏志」倭人伝が「女王国東渡海千里、復有国、皆倭種」（女王国から東に海を渡って行くこと千余里（400〜450 km）、まだ国々がある。それらの国々の人民は皆倭種）と書いていること。「新羅本紀」に、新羅第4代王「脱解の初年（57年）の項に、「脱解本多婆那国所生也。其国在倭国东北二千里」（脱解はもと多婆那国の生まれなり。その国は倭国の東北二千里に在る）とみえる。

だから多婆那国は、鳥取県東部から但馬地方、あるいは新潟県辺りとみている。

脱解の出身地を日本列島内とみる向きが多く、丹波国、但馬国、肥後国玉名郡などに比定する説があるが、音韻

の類似だけで確たる証拠はない。



▲ 3世紀なかばの韓半島²³⁶⁾
[三国志/東夷伝]・[三国史記]から推定(太字は民族名)

さらに、「新羅本紀」によれば、新羅の二代王南解は「五年春正月、王聞脱解之賢、以長女妻之」とあり、長女を賢者の脱解に嫁がせ、その二年後の「南解王七(西暦10)年七月、以脱解爲大輔、委以軍国政事」（脱解を以て大輔(最高官)に任じ、軍事・国政を委ねた）とある。「三国遺事」に記されている「駕洛国記」所引に、「脱解は駕洛に着くや、金首露の宮殿に入っていく「王位を奪いに来た」と宣言する。しかし、王と変身の術を競って敗れると、船で鷄林

（後の新羅の方へ逃げていった」²³⁶）ともあるらしい。

日本の伝承では、「稲飯命伝承」と「天日矛伝承」がある。「姓氏録」には、稲飯命〔記〕は稲水命と書くは、新羅の祖は鵜草葺不合命の子稲飯命（神武天皇の兄）だとしているが真偽の程は不明である。

ところで、前出の室谷氏によれば、韓半島南部に在った伽耶・加羅・任那の地は、倭人のたてた小国だったと云う。これらは半島における倭国の出先的存在であり、新羅と地続きだった²³⁶としている。

「書紀」には、韓半島の伽耶・加羅・任那の話が崇神天皇（在位180・198年）条から天武天皇（在位673・686年）条にかけて登場する。「神功皇后三十八（358）年紀」には「新羅征伐」の説話が書かれ、「八月に平群木兔宿禰・的戸田宿禰を加羅に遣わす云云。木兔宿禰等、精兵を進めて新羅の堺に莅む。（中略）。乃ち弓月の人夫を率いて、（葛城）襲津彦と共に来り」「応神天皇十六年紀」としているが、応神天皇（譽田尊）は、その11年前に崩御している。宣化天皇二（537）年

冬十月壬辰の朔日に、「天皇、新羅の任那に寇ふ（攻め入る）を以て大伴金村大連に詔して、其の子磐と狭手彦を遣わして任那を助けしむ」と、みえる。

その後、「欽明天皇紀」からは夥しく記事が増え、ほぼ毎年、任那関係の事件が見える。同天皇23（562）年条には、「春正月に新羅、任那の宮家を打ち滅ぼしつ」とあり、「秋七月に大將軍紀男麻呂宿禰を遣わして、兵を將て、（中略）。新羅の任那を攻むる状を問はむとす」。割注に、「加羅国、安羅国、斯岐国、多羅国、率麻国、古嵯国、子他国、散半下国、乞漚国、稔礼国の十国を任那と言う」とある。この10国は562年の任那滅亡に近い最末期の領域と云う。

まだある。「推古天皇十（602）年紀」には、「春二月の己酉の朔に来目皇子をもて新羅を撃つ將軍とす。諸の神部及び国造・伴造等、併せて軍衆二萬五千人を授く」。「夏四月の戊申の朔に將軍来目皇子、筑紫に到ります。乃ち進みて嶋郡（糸島市志摩、または響灘の若松区嶋郷）に屯み

て船舶を聚めて軍の糧を運ぶ。(中略)、六月、来目皇子、病に臥して征討つことを果さず」と、している。

これらから推して、任那の小諸国は天皇家領だったことを示唆している。さすれば当時の天皇は任那からの渡来人ではなかったか。それを検証する史料や物証もないので本項では省く。

○時代は遼^{さかのぼ}るが、「後漢書 東夷列傳」に、「建武中元二年、倭奴國が貢をもつて朝賀。使人は自ら大夫と称した。倭國の極南界なり。光武は印綬を以てす」⁶⁰と記録されている。

印綬は古代の中国で官印とそれを身につける組み紐のこと¹⁶で、建武中元二年は西暦57年にあたる。これが倭國の献使について中国の正史に具体的に記された最初の記録である。

この時に下賜されたとみられる「漢委奴國王」と鑄造された金印が、江戸時代の天明4(1784)年に博多湾沖の志賀島の田で農夫の甚兵衛が水路の付け替え工事中に見

つけ¹²³、今も福岡市博物館に展示されている。「漢委奴國王」は、「漢が委る奴國王」と読める²¹。

この時、金印の下賜を受けたは、「記紀」が記す第三代安寧天皇(師木津日子玉手見命)の王子、常根津日子命⁵⁹だったことが金印の画像解析ですでに判明した。

常根津日子は大和朝廷から北九州に在った奴國王として派遣され、統治を任されていたとみられる。そして常根津日子の没後、身内か側近が金印の側面に謚を書き込んだものであろう。

○新羅の脱解尼師今三年、夏5月、始林後の新羅が倭國と友好結び使者を交換する「三国史記・新羅本紀」とみえ、始林後の新羅と国交が始まった。解尼師今三年は、西暦59年にあたる。

○「後漢書 東夷列傳」に、「安帝永初元(107)年、倭國王師升等、貢ぎに生口百六十人を献じ請見を願う」⁶⁰とある。生口は奴隸とみられ、百六十人も引き連れて行ったとは驚きである。

倭国には大型船の無かった当時、大陸に渡るには十数人乗り程度の帆船だったであろうから、相当数の舟を連ね、海流や季節風に任せての手漕ぎ舟での渡航だったとみられ、その苦勞が偲ばれる。

ところで、「倭国王師升等」は「倭国王師升等」と読める。^{21),57)} 持参した國押人^{くにおしひと}大王の文書を、使者が「倭の國押人」と説明したものを「倭国王師升等」と当て字で書いたのである。

この人物は、「書紀」では第6代孝安天皇^{こうあん}で日本足彦國押人^{くにおしひと}天皇としている。「記」では大倭帶日子國押人命^{おおやまとたらしひこくにおしひと}のことである。

○古代韓半島の史書三国史記・新羅本紀^{しんらほんぎ}に、「阿達羅尼師^{アダラニイ}今王^{イサグムオウ}二十年五月、倭の女王卑弥乎^{ひみこ}、使いを遣わし来聘^{らいへい}す」⁸⁵⁾と。来聘^{らいへい}とは、外国から使節が来朝して礼物・貢物を献上することである。

阿達羅尼師^{アダラニイ}今王^{イサグムオウ}二十年は西暦173年にあたり、二世紀後半のことである。しかし、新羅^{しんら}としての建国は、さき

みたように四世紀中頃、朝鮮南東部の辰韓^{しんかん}12国を斯盧国^{しんら}が統一して建てた国¹⁶⁾だから、173年の記録はその前身斯盧国時代のものとみられる。

このとき斯盧国^{しんら}に献使を送った倭女王卑弥乎^{ひみこ}は、「書紀」の第7代孝靈天皇の皇女・倭迹迹日百襲姫命^{やまとととひもそひめ}で、第8代孝元天皇の異母姉^{いもあは}だったことが墓誌の解読⁵⁹⁾で判明した⁸⁰⁾。ここらあたりから女王卑弥乎^{ひみこ}の活躍が始まる。

この他、古代日本の外交^{がいごう}といつか貢献記録^{こうけんきろく}は、中国の古代史には沢山残っている。

○中国の三国志・魏書^{ぎしよ}の東夷列伝^{とういれつでん}(通称魏志倭人伝^{ぎしわじんてん})に、「景初三²³⁹)年、魏の明帝に朝獻した倭女王卑弥乎^{ひみこ}(卑弥呼^{ひみこ})に、『親魏倭王卑弥乎^{しんぎわおうひみこ}』とし印綬^{しんじゆ}を以てす」^{60),225)}とある。

この時の「親魏倭王卑弥乎^{しんぎわおうひみこ}」は、「書紀」に云う垂仁天皇^{すいにん}の異母妹^{いもあは}で、崇神天皇^{すじん}の皇女・豊鉏入姫命^{とよすきいりひめ}だった。

以上の貢献外交^{こうけんがいごう}は、すでに第六章で詳しく論証したように卑弥乎^{ひみこ}とは、王女^{ひめみこ}であり日巫女^{ひみこ}のことで、「書紀」に云う皇女^{ひめみこ}をさしている⁸⁰⁾ことわかり、実在の人物として

特定できた。

男王中心に書いた「**記紀**」は、倭迹迹日百襲姫や豊鉏入姫については、女王や天皇としての記述はない。

倭迹迹日百襲姫や豊鉏入姫は女王だったことを「**記紀**」は隠したのである。そして、神功皇后39年、40年紀に「**魏志**」の記述を割注に引用しているところをみると、「**書紀**」は年代を偽装して神功皇后が卑弥呼だったと示唆したつもりであろう。その結果、神功皇后撰政39、40年の実年代(359・360年)からみて、干支を二運(20年)も繰り上げていることが判明した。

上垣外憲一氏¹⁸⁷⁾は、「謎の四世紀」としているが、四世紀には中国の史書に倭国の記事が少ないからであろう。だからと云って空白ではない。欠史八代とされる2代綏靖天皇から9代開化天皇の在位は第七章で考証したように、BC41～163年である。察するに、同氏は欠史八代の時代を四世紀と勘違いしているからであろう。

○三世紀には女王卑弥呼(豊鉏入日賣命)が魏王朝へ献使

を送った確かな記録^{11),60)}がみられるし、三世紀後半からの国内記録では、各地に国造や縣主を置いて大和朝廷の基礎固めをすすめられた景行天皇(大帯日子淤斯呂和氣命・在位251～298年)や建内宿禰(大臣299～351年)が活躍した⁶²⁾。応神・仁徳天皇(在位343～419年)時代に先立つ神功皇后の三韓征伐は作り話としても、応神天皇は百濟外交によって論語や漢字を公式に手に入れた⁴⁴⁾。また、幾つかの地を名代として王家の体制を確立された実績は見逃せない。

ただ、この時代は中国との国交は途絶えたのだろうか。中国自体に倭国の記録が残らなかったことは確かである。しかし、隣国の新羅には小競り合いの記録が多く残っている。

○新羅「奈解尼師今十三(208)年四月、倭人が境を犯す。伊伐漚(利音)を遣わし、兵をひきいて之を拒ましむ」。また、「助賁尼師今三(232)年四月、倭人、猝かに至りて金城を囲む。王は、みずから出て戦う。賊、潰走す。輕騎を

遣わして之を追撃せしむ。殺獲する者、一千余級なり」

⁸⁵⁾と。そして、奈勿尼師今三十八(393)年夏五月、「倭人が来て金城を囲み五日間解かなかった。将士はみな出て戦おうとしたが、王は今、賊は舟を棄て深く入っているから、死地にいるようなものだ」と云った。そこで城門を閉じた。賊は功なく退いた。王は勇騎二百を遣り、帰路を断った。また歩卒一千を遣り、獨山まで追ひ挟み撃ちをして大いにこれを敗った」(三国史記・新羅本紀⁸⁵⁾)と。倭は、新羅とは長年敵対関係にあったとみえる。

○百濟本紀阿華王六(397)年五月条には、「百濟王が倭国と友好を結び太子の腆支を以て質と為す」⁸⁵⁾。

○高句麗³⁹⁹年条に、「広開土王、平壤に巡下す。而るに新羅は使いを遣わして王に曰く。倭人はその国境に満ちて城池を破壊し奴客を以て民と為せり。王に帰して命を請うと」(「広開土王碑九己亥(399)年」と、新羅の使いが高句麗王に倭人の悪行を告げたとしている)。

この年の倭王は、「書紀」の仁徳天皇か履中天皇である

が、天皇の差し向けた倭兵かどうかは不明である。

○百濟「使いを倭国に遣わして大珠(真珠)を求めしむ」(百濟本紀阿華王11(402)年5月条)。

○百濟に倭国の使者到る。王、迎えて之を勞うこと特に厚し(百濟本紀阿華王十二(403)年2月条)とあり、百濟とは友好関係にあったようである。この時、使者を送った倭王は、去來穗別尊履中天皇であるが、親の大鷦鷯尊(仁徳天皇)もまだ健在である。

○高句麗404年「広開土王十四甲辰(404年)、而ち倭は不軌にして帶方界に侵入す。(中略)・倭寇、潰敗し斬殺すること無数なり(「広開土王碑」と、倭軍が高句麗の帶方界に侵攻し、多数の兵が斬殺されたとしている。高句麗との関係はあまり親密ではなかったのであろう)。

○中国は宋時代の「宋書 倭国伝」には、「元嘉二(425)年、讚死して、弟、珍立つ。使を遣し貢獻し、自ら使持節・都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王と称し表にて除正を求む。詔して安東

將軍倭國王に除す」⁶⁰と。使者の名前は出ていないが、珍はみずらを六国諸軍事・安東大將軍・倭國王の称号を文書で要求したとしている。

425年は、19代允恭天皇若子宿禰の時代である。「宋書」は何故、珍と書いたのかは不明であるが、若子宿禰命允恭天皇は水齒別命(18代反正天皇)の弟⁴⁴)とあり、しかも履中天皇や反正天皇は、まだ健在であるから、死したとする讃は、419年に亡くなった大鷦鷯尊(16代仁徳天皇)をさしているとみられる。

17代履中天皇(伊邪本和氣命)の没年は、墓誌に「伊邪本和氣命 壬申(432)二月五日 年六十四」(上石津ミサンザイ古墳)「また、18代反正天皇の墓誌は、「戊寅(438)年七月五日 年五十九」^{31),59)}とあるから、この年は両天皇はまだ他界していない。

ともあれ、こうして倭国は中国(宋王朝)の傘下に入り、安東將軍倭國王の位に叙されることで近隣の韓半島諸国との外交や国際紛争に優位に立とうとしたのであろう。

○「三国史記・百濟本紀」に、「有王二(428)年二月、百濟に倭国の使、到る。従者五十人なり」とあり、大勢の従者を連れた使者が出かけている。この使者を送ったのも允恭天皇若子宿禰の時代である。

○「宋書帝紀」元嘉七(430)年春正月是の月、倭國王、使遣わし方物を献す」⁶⁰と。この年に使者を送り方物を届けたのも、「書紀」に云う19代允恭天皇若子宿禰とみられる。

○「宋書帝紀」元嘉十五(438)年夏、倭國王の珍(19代允恭天皇)を以て安東將軍となす」⁶⁰と。

○「宋書 倭国伝」元嘉二十(443)年、「倭國王、使を遣し奉獻す。復た以て安東將軍倭國王と爲す」⁶⁰と、19代允恭天皇は、重ねて「安東將軍倭國王」の称号を受けている。

○同じく「宋書帝紀」元嘉二十(443)年、河西国、高麗国、百濟国、倭国、並に使遣わして方物を献す。倭王(允恭天皇)、宋に遣使し、安東將軍倭國王に任じると、「倭国伝」と「帝紀」の両方に記されている。「また、元嘉二

十八(45)年、秋七月甲辰、安東將軍倭王、倭の濟允恭天皇、号を安東大將軍に進む」⁶⁰⁾と、ここでは安東將軍から安東大將軍に昇進している。

○「宋書帝紀」大明六(462)年、倭国王の世子の興を以て安東將軍となす」⁶⁰⁾と。19代允恭天皇の後を継いだ20代安康天皇(穴穗命)は、456年になくなっているため、興はおそらく允恭天皇の王子黒日子命(420～468年⁵⁹⁾)か、王子白日子命(420～483年⁵⁹⁾)かとみられる。

○「宋書倭国伝」昇明二(477)年、詔して武を六國諸軍事、安東大將軍、倭王に除す」⁶⁰⁾とみえる。

武は雄略天皇(大長谷命 418～479年⁵⁹⁾)とみられ、「六國諸軍事安東大將軍倭王」に叙されている。六國とは、同史の元嘉二(425)年にみえる百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓、それに倭の国々である。

○「宋書帝紀」昇明二(478)年、倭国王武、使いを遣わし方を献じ、武を安東大將軍となす」⁶⁰⁾と。この時の武も在世代からみて21代雄略天皇(大長谷命)であろう。

○「南齊書列伝」建元元(479)年、武(雄略天皇)を鎮東大將軍となす」⁶⁰⁾とする。しかし、武(雄略天皇)はこの年に没している。

○「梁書列伝」天監元(502)年、武の号を征東大將軍に進む」⁶⁰⁾としているが、雄略天皇はすでに23年前に没しているため、この時の武は武烈天皇||小長谷若雀命(489～506年⁵⁹⁾)をさしているとみられる。日本の史学界では、倭王讚・珍・濟・興・武を、倭の五王と呼んでいる。

こうして、人物名の記されていないものまで数え上げれば、きりがないうちに中国詣でをして朝貢し、中国はまた倭王を配下としての称号を与えている。

珍(反正天皇||蝮水齒別命)のように自ら六國諸軍事・安東大將軍・倭国王の称号を文書で書いてくれと要求したのもみられる。それは外交や軍事等、いざという時に宋王朝を後ろ楯として機能させたい意図があったであろう。今日の日米安保とまでいかずとも、宋倭同盟だったであろう。

中国に対する貢献は、この後しばらく途絶えるが、隋の時代(600年)に再開され、唐の時代まで続いた。

隋や唐の時代になると、進んだ中国文化・文明の導入が主目的となり、大勢の団員を編成しての遣隋使・遣唐使を派遣することとなった。「書紀」も、それは度々記している。

○「隋書倭国伝」「開皇二十(600)年、倭王、姓は阿每(天)、字は多利思比孤阿輩雞弥(足彦大王)と号し、使いを遣わして闕(長安の宮)に詣る。上(天子)、所司(長官)をしてその風俗を訪わしむ云々」⁶⁰⁾と。

隋の開皇二十年は、「書紀」によれば推古天皇八年、太子厩戸皇子は27歳で摂政について活躍している年にあたり、倭王は推古天皇(女帝)の筈である。しかし、王の妻は雞弥(公)と号し、後宮に女六、七百人あり。太子を名付けて和歌弥多弗利とす」⁶⁰⁾ともある。

「書紀」は、この時の遣隋使には何も触れず沈黙しているが、編者らは「隋書倭国伝」を読んでいた筈である。素

直にこれを書けば、史実がばれるから、あえて書かなかったのであろう。

実は、この倭王は蘇我馬子大王(天足彦大王⁹⁹⁾)で、王の妻は雞弥(蘇我馬子の妻)物部鎌姫大刀自連(公⁶²⁾)、太子は大王蘇我馬子の長男蘇我善徳⁶⁹⁾だったとみられる。

また大業三(607)年のこととして、「その王の多利思比孤(足彦)天皇の古名)、使いを遣わし朝貢す。……その国書にいわく、日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや云々。帝は覽て悦ばず。……蛮夷の書、無礼あるものは復以て聞かす勿れ」と、時の隋王煬帝は、蛮夷の國から侮辱されたと受け取り怒っている。実はこの時の王多利思比孤も蘇我馬子大王であろう。

ときに、「書紀」では推古天皇十五(607)年、大和に多くの池を造り、諸國に屯倉を置いたと「書紀」は記している。蘇我馬子大王は57歳の年である。

推古天皇十六(608)年、隋から帰った使者小野妹子は機転を利かせ、隋王から受け取った国書を帰途に百濟で盗

まれたとして朝廷に隠している。おそらく、一連の悶着もんちやくが書かれていたので、あえて紛失ふんしつしたことにしのだろうとみられている。

ともあれ、この時代は蘇我馬子大王と太子蘇我善徳そがのぜんとくの活躍や業績を、「書紀」は推古天皇と太子厩戸皇子うまやとのみこと云う架空の人物を創作して史実を隠滅いんめつしたのだった(第十三章参照)。

古代東アジアの超大国だった中国は、とかく東アジア全域の制覇せいぱを狙っていた。七世紀には、建国の勢いに乗って周辺諸国に迫り、半島諸国や倭(日本)は隋ずいの陰にあって自立の道を探るか、それとも隋に同化するか、二者択一たくいつを迫られていたであろう。大王蘇我馬子そがのうまこが選んだのはまさに前者だったとみられる。

後の天智天皇中大兄なかのおほえは、当時の唐に迎合したが、壬申じんしんの乱で天智朝を倒した天武天皇(大海人)は、西アジア的な太陽信仰に基づく文化的にも独立した日本国家の確立を目指した²⁾とみられている。

○「旧唐書」貞観五(63)年条、日本国の者は倭国とは別種なり。その国、日の辺りに在るを以て、故に日本を以て名となす。或いは曰く、倭国は自らその名の雅みやびならざるを惡み、改めて日本となすと。(中略)、その人の入朝は、多く自ら矜大きやうだいにして実を以て対せず。故に、中国は疑う「云云」とある。日本国は倭国とは別で、その国は日の辺りに在るので日本とした。また、倭と云う雅みやびでない字の意味を憎み、改めて日本にしたというのである。

このとき、中国(唐)では初めて「日本」という国名を認識したということになる。また、そのときに「入朝した使者の多くは尊大で、誠実でないので中国は疑う」と云っている。多分、これまでの使人とは態度が変わったのであろうか。

唐の貞観五(63)年は、「書紀」によれば、舒明天皇三年にあたるが、その前の年「秋八月五日、大仁の犬上君三田耜いぬかみのきみみたすき・大仁の薬師恵日を以て大唐に遣わす」とみえ、この時の遣唐使をさしているのであろう。

長年、中国は倭人、倭国と蔑んで呼んできた。単に倭と書いたものも多い。

倭という字意は、調べてみると「背が曲がって丈の低い人」である。これを筆者のもとに研修に来ている中国人青年に尋ねてみると、「陰湿・隠・恥ずかしい・控えめ・引っ込み思案・逃げ腰」といった意味にとられていることがわかった。これも元々、中国人の名付けたものである。

日本でも古代から、「倭」・「和」の字を自称に用いて通例は「やまと」と読ませ、王家の人物には倭を冠している名前が多い。室町時代頃になって、「わ」と音読して単独に日本、または日本のものを意味する語として用いるようになった¹⁶⁾と云う。

中国は隋・唐の時代、日本は中国文化・文明の導入に、盛んに遣隋使、遣唐使を派遣したことは「書紀」や「続日本紀」、また「日本後紀」にもみえる。

高野山の開祖空海が、唐に渡って真言密教を学んだの

も唐の貞元二十(804)年だった。

「旧唐書 列伝・東夷・倭国・日本国条」⁶⁰⁾に、「貞元二十年、使いを遣わし、留学生橘逸勢、学問僧空海来朝す」とある。しかし、この時代を記した「日本後紀」には、空海の派遣についての記録はない。

ただ、「日本後紀」¹⁰⁶⁾に、「延暦二十三(804)年三月二十八日、遣唐大使藤原葛野麻呂に節刀を授けた」とあり、「同日、二十四(805)年六月八日、唐より帰国した遣唐使の第一船が対馬の下県郡に停泊し、藤原葛野麻呂らが、去る七月六日に肥前国松浦郡の田浦を四船で出港した」旨の記載があり、「第二船二十七人がすでに九月一日に明州(浙江省寧波市)から十一月に長安城に入り云云」とみえる。

また、「同年五月十七日に第二船で帰った菅原朝臣清公が肥前国の鹿島に到着して云云」と。

さらに同年七月条に「十六日に太宰府が言上した。第三船は、今月四日に肥前国平戸を出港したが強風に遭い遭難、三棟朝臣今継は身を逃れて岸に辿り着いたが、船

は行方不明になった」とあり、第四船はどうなったのか記載はない。空海^{くわい}も、おそらくこの時の遣唐使船に便乗して行ったのであろう。

とにかく、「記・紀」をはじめ、「続日本紀」・「日本後紀」という膨大な歴史書がありながら、それを他国の歴史書や墓誌^{たが}で糺さなければ、内容が信用出来ないというのも情け無い話である。

